

海浜リゾートの創設と観光資本家

—— 東京ベイ臨海型テーマパークの魁・三田浜楽園を中心に ——

Establishment of a Seaside Resort and its Capitalists of Tourism : Focusing on
the “MITAHAMA RAKUEN”, Pioneer of Theme Parks along the Tokyo Bay

小 川 功

Isao OGAWA

海浜リゾートの創設と観光資本家

——東京ベイ臨海型テーマパークの魁・三田浜楽園を中心に——

Establishment of a Seaside Resort and its Capitalists of Tourism : Focusing on the
“MITAHAMA RAKUEN”, Pioneer of Theme Parks along the Tokyo Bay

小 川 功

要 旨

現在東京ベイ・エリアは東京ディズニー・リゾートに代表される海浜リゾートの一大集積地である。当該地域の臨海遊園地の先駆として京成電鉄直営の谷津遊園とともに三田浜楽園が有名で、ともに湾岸部の塩田等を埋め立てて築造された。本稿では戦前期に文豪川端康成、太宰治なども滞在して小説の舞台となった日本文学ゆかりの三田浜楽園を取り上げる。事業の永続性にリスクが不可避な観光経営の視点からこの種の観光施設の経営が一般には不安視されていた時期に、いち早く東京湾岸の将来性に着目して一大海浜リゾートを創設した資本家は如何なる人物で、広大な敷地と巨額の建設費はいかなる手段により調達されたのかを明らかにしようとしたものである。すなわち同地は明治初期に高級軍人により塩田として開発され、請負業者などに譲渡され地元の船橋商業銀行の資金で拡張された。この間請負業者の没落、船橋商業銀行の破綻、台風による水害等を経て最終的に塩田の権利を継承したのは京和銀行専務の平田章千代であった。平田塩業により経営された塩田もやがて塩田そのものの採算性の低下に加え、金主の京和銀行の破綻という予期せぬ不幸に見舞われる。こうした環境の激変の最中に昭和2年12月遊園地、温泉旅館、土地建物の経営を目的とする資本金10万円の観光企業・三田浜楽園が設立された。本稿では設立時の三田浜楽園の役員構成等を詳細に分析することにより、京和銀行の人脈との関係を解明しようと努めた。また北海道の「板谷財閥」から海運業で蓄積した豊富なリスクマネーが三田浜楽園の土地を担保として豊富に供給された事実も明らかにした。

はじめに

東京ベイ・エリアには東京ディズニー・リゾートをはじめ、東京都営の葛西臨海公園などが集積して我国有数の海浜リゾート地帯を構成している。また昭和30年代には「汐干狩や海水浴の出来る京成電鉄直営の臨海大遊園地」¹⁾たる谷津遊園や、全国温泉コンクール第二位の栄冠を獲得した「汐干狩に海水浴一日楽しく遊べる海の温泉娯楽場」²⁾たる船橋ヘルスセンターなどが林立していた。このうち船橋ヘルスセンターはオリエンタル・ランド社の祖でもある丹沢善利が広大な塩田跡地の工業地埋立事業に行き詰まり、苦肉の策として大衆相手の新しい「湯治」ビジネスモデルを創始した観光経営史上画期的な観光施設である。丹沢善利は安政3年5月山梨県西八代郡市川大門町の丹沢七郎左衛門の次男に生れ、生盛薬館主として「君夙に祖先伝来の妙薬を拡布せん」(京浜, p344)と明治32年「再び出京して数種の売薬を製し市内各所に行商…大製薬場並に邸宅を月島に設け…今や全国に一千人の行商を派し、且つ遠く満韓地方へ支部若くは出張所を置き」(京浜, p344)、大正2年3月2日「薬剤及化粧品ヲ製造販売スルコトヲ以テ目的トス」³⁾の生盛薬剤を設立して社長となり、三ツ引物産専務、松竹キネマ監査役、大正12年6月丹沢は義弟の塚越保、「友人の貿易商熊取谷七松」⁴⁾らと日仏製糖を発起、戦後に朝日土地興業設立した。船橋ヘルスセンターの「対岸の本町と海神町にわたる五十三万坪」⁵⁾という第二の大計画の真中に置き去りになっていた私有の塩田、「個人が所有していた遠藤浜十一万坪埋立てるについては、地主の木村栄吉氏が朝日土地には売らないが、丹沢個人なら売るというので、止むなく別会社(船橋土地興業)を設けて事業をすすめ」⁶⁾たとされる。晩年には放漫経営が再燃し、同郷の後輩・「小佐野<賢治>の援助がなかったら、丹沢は完全にお手あげとなっていた」⁷⁾と伝えられる。丹沢自身も随筆の中で「元來わたしはコリ性のうえに仕事ずきなので、はじめると夜も昼もあくせくしないと気がすみません」⁸⁾と告白しているように、典型的な「虚業家」⁹⁾型の資本家であったと推測される。

丹沢父子が創始したオリエンタルランド社の経営する著名な臨海型テーマパークに関しては観光学の立場から数多くの調査・研究の蓄積があるが、本稿ではこうした船橋ヘルスセンターからオリエンタルランドへと継承されていく東京ベイ・エリアに展開する臨海型テーマパーク¹⁰⁾の先駆形態と思われる三田浜楽園(現在の船橋市役所の南側一帯)の成立についてまず取り上げたい。遊園地、ラヂウム温泉、海水浴、割烹旅館などの複合観光施設である三田浜楽園は昭和10年ころ川端康成、太宰治などの文豪が相次いで訪れて執筆、小説の舞台として取り上げられた日本文学ゆかりの地として郷土文学研究家の大木勲氏によって詳細に紹介¹¹⁾されている。大木氏は「楽園」の名称に着目し、「『三田浜楽園』は“遊園地”を併設した“割烹旅館”」(大木, p22)である点を強調される。

筆者は昭和50年代民間金融機関に在籍した当時、京成電鉄の主要債権者で構成する「九行

会」のメンバーの末席を汚し、バラ園で有名な谷津遊園やホテル・チェーンなど同社観光施設をやむなく換金して資金化¹²⁾する“債鬼”の一端を担った苦い経験がある。本来観光施設の建設を支援すべき金融機関が逆の役割を果さねばならなかったことは誠に忸怩たるものがある。こうした観光破壊者としての自戒反省の念を込めて、当該エリアの観光経営の苦闘・興亡を原点から見直してみたいと考えるに至った。そこで十数年ぶりに当該エリアの現地調査を再開する中、船橋市の三田浜楽園跡地を訪れ、昭和47年4月建立の「三田浜塩田発祥の地」の碑に遭遇した。碑文には平田章千代なる人物が明治13年塩田を開設した仁礼景範を経て、大正7年小川紋蔵¹³⁾から継承した千葉県東葛飾郡船橋町九日市浜田で26町7反の塩田を経営したとある。この三田浜塩田の碑を建立した平田四郎(昭和47年5月死亡)・研吾両氏こそは本稿で取り上げる海浜リゾートたる株式会社三田浜楽園の二・三代の代表者であり、東京ベイ臨海型テーマパークが当地に誕生するまでの複雑な経緯を解明する貴重な鍵を筆者に与えてくれた。

本稿ではなぜ海浜に立地したのか、広大な敷地はなぜ取得できたのか、設立に関与したのはどういう人々か、なぜ巨額の投資を決断したか、土地会社形態¹⁴⁾を採用した理由、その施設経営の資金はどこから調達したのかなど、観光投資論の視点を中心に述べていく。中心人物のはずの平田章千代が表面に出ず、後に代表取締役となる平田りん夫人が役員として活躍した背景¹⁵⁾を探索するなかで、筆者自身も身をもって痛感した観光経営の不確実性と、観光投資を支援する金融機関との宿命的な因縁がここでも見られたことを明らかにしたい。なお創設者の平田章千代が経営した京和銀行に関してはすでに前稿¹⁶⁾で概要を述べており、平田がいかなる人物であり、平田の大口スポンサーとして登場する当時珍しい存在の女性銀行頭取との関係についてはさらに別稿を予定している。なお本稿では新聞雑誌、会社録、頻出資料等は巻末に示した引用文献の略号を使用した。

1. 船橋商業銀行と松遠塩田

平田章千代が継承した千葉県船橋の松遠塩田の金主である船橋商業銀行から話を始めよう。船橋商業銀行は明治31年5月16日船橋町九日市に設立され、資本金25万円(払込済み)、5,000株であった。(諸 T5, 下, p65) 創立の中心人物の松本岩次郎(千葉県東葛飾郡船橋町九日市)は穀物商・松本・マル井(商, 顧 p12), 塩商(日韓, p21), 千葉県塩売捌合資会社代表社員で、船橋商業銀行頭取, 千葉県農工銀行監査役を兼ねた。(要 M40, 役, p384)

明治41年の同行役員は頭取松本岩次郎を筆頭に取締役山田惣次郎[「同所一流の資産家…旧家」(町村, p189)である酒類商兼荒物商金銭貸付業・山田屋・ヤマ久(商, 顧 p12), 酒類商兼醤油(日韓, p19)], 金子平五郎[「当町一流の資産家」(町村, p188)たる質屋兼金銭貸付業・カネ平(日韓, p19)], 斉藤惣次郎[米穀商兼切干大根農産物商(日韓, p19)], 大野彦次

郎 [醤油醸造業・加納屋・丸叶 (日韓, p19)], 監査役大野三五郎 [乾物商兼青物商 (商, る p12), 青物商兼肥料・八百三 (日韓, p19)], 松本長次郎 [穀物商・酒長・ヤマ長 (商, る p12), 米穀商兼荒物大根切手商 (日韓, p19)], 高村篤蔵 [乾物商兼塩物商 (商, る p12), 干魚塩魚商 (日韓, p21)] とほぼ全員が船橋町九日市の有力商人であった。(日韓 p19)

明治 39 年では資本金 15 万円 (42,500 円払込), @ 50 円, 積立金 11,200 円, 預り金 279,974 円, 前期, 前々期配当 1 割強 (諸 M39, 下 p64), 45 年では資本金 15 万円 (7.5 万円払込), @ 50 円, 積立金 33,100 円, 預り金 482,741 円, 前期, 前々期配当 10% (諸 M45, 下 p67), 松本長次郎が退任済みで, 中山村の岡田耕平¹⁷⁾ が末席の監査役に加わっている。(諸 M45, 下 p67)

明治 34 年ころ開業した船橋町海神新浜田地先の松遠塩田は船橋商業銀行頭取松本岩次郎と同行設立にも関与した地元の土木請負業者・遠藤君蔵との共同経営であった。遠藤君蔵は慶応 3 年 4 月 12 日北埼玉郡岩瀬村に生れ, 明治 14 年ころ土木請負業を開業 (商工, p15), 遠藤組の代表者として明治 26 年「総武鉄道線路の敷設を請負い, 大金を握った」(市史, p394) ほか, 地元の房総鉄道でも「各区间工事は是亦遠藤君蔵が一手に請負施工」¹⁸⁾ したほか, 関西鉄道奈良延長線, 東武鉄道¹⁹⁾, 鉄道連隊, 東葛人車鉄道などの工事も請負った。明治 39 年 5 月設立の津田沼製塩監査役 (要 M40, p40) のほか, 東京煉瓦監査役, 免美炭礦合資会社代表社員 (要 M40, 役, p440), 地元の総武鉄道 650 株主²⁰⁾, 船橋鉄道② 500 株主 (帝 T5, p7), 大正元年には東葛人車鉄道 20 株主 (市史, 史料編九, p200) であり, 千葉県東葛飾郡船橋町九日市 1123 の自宅は「曾って宮家の御宿を承はりし光栄を有す」(辞書, p421) る「赤レンガ塀を持つ屋敷で一際目立った邸宅」²¹⁾ であったと伝えられる。遠藤は一時期「関東一流の請負業者として旭日昇天の勢ひ」(辞書, p421) であったが, 大正 3 年 1 月の調査では正味身代未詳, 商内高未詳, 所得税…, 取引先の信用の程度 5 段階の下から 2 位 Da (商工 T3, p15) と冴えず, 本業の「東北線の荒川鉄橋工事で失敗し没落」²²⁾ したと伝えられ, 松遠塩田への融資も焦付き, 「大正某年此の地は債権者船橋商業銀行の所有に帰し, やがて競売の結果, 東京京橋の金物問屋柴田柳三郎…の所有となった」²³⁾ と伝えられる。競落者の柴田柳三郎 (東京市京橋区本材木町 3-9) は 15 年前開業の銅鉄商 (商工 T3, p495), 銅鉄類鉄道用具販売商・合資会社柴田商店代表社員, 東京燠炭製造所取締役, 直接税 11,860 円であった。²⁴⁾ 登記簿では船橋市史の記述とは若干異なるが, 松本岩次郎名義の塩田が大正 4 年 1 月 16 日弁護士・杉山弥太郎²⁵⁾ の申立による千葉県裁判所の競売手続開始決定を経て, 大正 4 年 3 月 20 日船橋町の加瀬定治郎 (未詳) に競落された事実が確認できる。(閉鎖①)『房総紳士録』の多額納税者名簿にも掲載されていない加瀬が船橋商業銀行関係者だとすれば同行による自己競落の可能性が高い。かくして松遠塩田や船橋鉄道²⁶⁾ など不良債権に災いされた船橋商業銀行は大正 7 年 6 月 13 日任意解散した。²⁷⁾

大正 8 年 5 月松遠塩田は大正 6 年の大水害後に製塩を再開して「間もなく, 柴田<柳三郎>

は平田^{あき}章千代なるものに此の地を売り払った…かくして昭和四年九月まで継続したが、前述の如く官命を以て廃業するに至った²⁸⁾と伝えられる。『船橋市史』は平田章千代に言及することは避けたが、登記簿では前述の加瀬定治郎が競落した塩田を平田が大正8年7月15日買得した事実が確認できる。(閉鎖①)この日付は平田製塩所の創業年月の大正8年7月²⁹⁾とも一致する。平田は当時土木請負業の高瀬信(次項)と青島で塩業を共同経営しており、没落した同業者の遠藤君蔵が所有する塩田の引受けに乗り出す基盤があったものと考えられる。また銀行家として同業・船橋商業銀行の窮状を察知して触手を動かす機会もあったと思われる。

2. 日東製塩合資と平田塩業合資

土木請負業・加賀組の経営を引き継いだ高瀬信(浅草区北富坂町17)は大正7年山東半島・「青島に於て製塩業を企画し、同地塩田三百五十町歩を民政庁より払下げ、大正八年中後援者たる平田章千代氏其他の諸氏と共に該塩業所を資本金三十六万円の日東製塩合資会社となし、爾来専売局に対し年六千万斤の納入契約を締結し、横浜、神戸、門司等の各支局に納入し好業績を挙げ」(T9.10.28内報②)ていた。高瀬は南方商会という製氷機工作所の経営に加え、秋田県黒滝山の杉材の払下げを受けたり、割栗石の採掘鉱山の経営など「鉱業、製氷機、製塩業、山林其他多岐に亘る事業を経営し…日夜東奔西走」(T9.10.28内報②)、大正9年ころにはさらに横浜の中外運輸代表取締役(要T11, 役中p58)に就任したため、「日東製塩合資会社の代表社員を辞したるも、出資権は今尚ほ保有」(T9.10.28内報②)していた。高瀬は日東製塩合資とは「別に平田<章千代>氏と提携して千葉県下に塩業を営む」(T9.10.28内報②)とされているので、平田章千代は国内外を通じて提携関係にある高瀬の「後援者」であったと考えられる。

平田の主宰した平田塩業合資会社は大正8年1月資本金30万円で設立され、本店を平田が専務の京和銀行本店所在地である神田区中猿楽町17に置き、平田が取締役の青島塩混合保管が所在する青島にも支店を置いていた。(要T11, p243)したがって平田は関係する日東製塩、青島塩混合保管、平田塩業の3社を通じて青島の塩業にも深く関与していたと考えられる。

第一次大戦のドイツ租借地の占領を機に日東製塩、日華塩業、山東製塩公司³⁰⁾など、「邦人事業家は競ってこの地区の製塩事業に進出し、その商社の数も十数社に達し、大規模な塩田開設」³¹⁾が続出、物資不足期に「青島から多量の安価なる食塩の輸入」は「需要供給の平衡を計るに便なるもの」³²⁾と歓迎された。しかし日系製塩業者は大正11年3月山東半島・青島の中国への還付に伴い打撃を受け、「華人経営の塩田に比し位置宜しきを得ざるを以て…製塩界の前途に対して悲観説に傾き」(T11.3.9内報①)、「暗雲低迷」(T11.3.9内報①)、「同地の食塩問題は未だ解決が着かない」³³⁾状態に陥っていた。青島塩の輸入は大正12年以降ほぼ途絶となり、「青島塩は打ち続く動乱と、数年間の輸出禁止によって、塩田経営者は頗る苦境にあった」(S2.9.24T)

とされる。

平田塩業の代表社員は平田章千代(7万円出資)、出資社員は丹生谷綸(5万円)、杉田利盛(3万円)の2名(要 T11, p243)で、ともに大正11年6月現在で京和銀行非株主であった。丹生谷綸(赤坂区青山北町6丁目46)は大正元年所得税…円、2年9月調査で雑業、正味身代2,000～3,000円、商内高未詳、取引先の信用の程度5段階の中位Ca(商工 T3, p71)、栄屋石綿紡織所取締役(要 T11, 役上 p84)、会社員、所得税66円(紳 T14, p93)、大正14年では滝野川546、会社役員、対物信用15～20万円、対人信用普通、年商1～2万円、盛衰は常態(帝信 T14, p385)とされた。

杉田利盛(本所区向島須崎町12)は大正3年所得税…円、3年6月調査で8年前開業の製材、正味身代1～2万円、商内高7.5～10万円、取引先の信用の程度5段階の中位Ca(商工 T3, p541)、大日本製紙取締役、東京砂糖貿易、帝国木材各監査役(要 T11, 役下 p239)、大正14年では深川区和倉31、大正2年開業の材木会社役員、対物信用15～20万円、対人信用普通、年商7～10万円、盛衰は常態(帝信 T14, p386)、14年所得税…円、14年1月調査で製材、正味身代未詳、商内高未詳、取引先の信用の程度5段階の下から2位Daとされた。(商工 T15, p658)

杉田利盛が監査役を兼ねる東京砂糖貿易(大正10年6月設立、京橋区岡崎町1-1)には船橋の五日市塩田を石井亮蔵³⁴⁾から買収した砂糖問屋(市史, p393)の熊取谷七松³⁵⁾や、塩田跡を買収し船橋ヘルスセンターを創業する冒頭の丹沢善利などが役員(要 T11, p97)として顔を並べており、平田章千代がこうした人物とのネットワークを形成し、国内外での塩業に深く関与していたことを窺わせる。

一方、船橋町九日市浜田の三田浜塩田の経営者小川紋蔵は「後年、遊蕩の果てに塩田はじめ多くの家作、土地等を手放す端目に陥り、一族がその後始末に大変な苦勞をした」(大木, p27)と伝えられる。大正7年この小川から26町7反の三田浜塩田を継承・経営したのが平田塩業代表社員たる平田章千代であった。³⁶⁾

大正10年における船橋町の製塩業者は13人、釜屋数15軒、面積50町2反と、水害で衰退した行徳町の製塩業者を逆転³⁷⁾しており、松遠塩田と三田浜塩田の両方を経営した平田は船橋・行徳地区最大級の製塩業者に位置付けられよう。ちなみに「平田製塩所」(九日市、工場主名平田章千代)の大正9年1月1日における職工数は男20、女5、計25で、行徳の松原新之助経営の再製塩工場(男14)、小川与助経営の再製塩工場(男13)、財部再製塩行徳工場(男12)などを凌いでいた。³⁸⁾

3. 三田浜樂園

平田章千代の12年所得税は6,269円(紳T14, p700), 大正14年では製塩会社役員, 京和銀行専務外会社役員, 対物信用未詳, 対人信用薄, 年商未詳, 盛衰は衰(帝信T14, p370), 14年所得税…円, 14年10月調査で会社員, 正味身代未詳, 商内高未詳, 取引先の信用の程度5段階の下から2位Daという状態にあった。(商工T15, p629)

平田が経営する三田浜塩田は「昭和四年九月に至り, 官命を以て, 其の業を廃止することとなった。その跡は遊園地となり, 三田浜遊園と呼ばれて居った」(市史, p393)とされている。市史などでは言及されていないが, 三田浜塩田から三田浜樂園に転換する時期は平田が専務として経営していた本業ともいうべき京和銀行が大正11年12月取付に遭遇³⁹⁾して整理を余儀なくされる時期に合致する。大正13年1月7日京和銀行は第二次整理案として「一土地会社を新設して右欠損金を負担せしめ, 改めて預金の中より右欠損と同じ額を, 右新設会社の株式払込に振替(一株二十円全額払込)ゆるの案を樹て」(T13.8.2T), 預金者への支払の一部を新設する土地会社の株式に振替えようと計画していた。こうした京和銀行の苦境の最中での三田浜樂園の新設計画は京和銀行整理案の延長線上に位置付けられる可能性があるろう。

昭和2年12月1日(『船橋町誌』では昭和2年11月)平田章千代の自宅に相当する東京府豊多摩郡渋谷町大字中渋谷385番地に, 「一, 遊園地ノ経営, 二, ラジウム温泉料理飲食店及旅館, 貸室ノ経営, 三, 土地建物の経営及売買, 四, 右三章ニ付帯スル事業経営」⁴⁰⁾を目的に資本金10万円(全額払込済み, @20円)で設立された。「昭和2年に開業した三田浜割烹旅館」⁴¹⁾が三田浜樂園経営の「ラジウム温泉料理飲食店及旅館」に該当するとすれば, 三田浜塩田の官命廃止の昭和4年9月より2年ほど前にすでに塩田区域内で割烹旅館が開業しており, (株)三田浜樂園は既に開業していた観光事業を現物出資等により継承していた可能性が高いと思われる。塩田廃止の跡が三田浜樂園となったというのが通説だが, 三田浜樂園設立前の平田家の家業たる平田塩業の時代からすでに瀬戸内の塩田に押されて採算的に厳しくなっていた塩田を部分的に廃止・縮小しつつ, 次第に遊園地・割烹旅館業に転換しつつあったのではなかろうか。

平田が買収した三田浜塩田の経営者・小川紋蔵の子息与市は「塩田を廃業, 市川田尻の人, 福岡はなと世帯を持つと, 大正十年, 二人で亡父の素人相撲時代の四股名『玉川』を名乗って料亭を始めた」(大木, p33)が, これが「代表的な割烹旅館」⁴²⁾として登録有形文化財に指定されている割烹旅館・玉川である。塩田跡に立った新興料亭・玉川が船橋の newName となり一定の成果を挙げたことが隣接する三田浜塩田の平田塩業側にも当然に経営転換への大きな刺激となったことは想像にかたくない。

三田浜塩田の土地には京和銀行の取付・整理に関連する以下のような登記事項が散見される。すなわち大正11年12月25日日本勧業銀行は7.5万円を8.1%, 京和銀行専務の平田章千代

から担保提供された船橋土地等を共同担保として融資契約し、29日登記した。(閉鎖②)これは大正11年12月30日「日本勧業銀行より資金の貸出を受け、同月三十日より開店」⁴³⁾した京和銀行の預金者への払戻資金であったと思われる。同時期に京和銀行は「奈良市在住の頭取木林ゆう子氏の全財産を担保に日本勧業銀行から資金の融通を受ける事に決し、二十九日、木林家の全財産を提供せる登記の手続きを終えて、三十日勧銀より貸し出しを受け、直ちに電報為替で各支店に送金をなし三十日開業した」(T11.12.31時事)と報じられたことから裏付けられよう。

また大正12年5月26日駿河銀行は5.3万円を平田章千代の船橋土地等を共同担保として京和銀行へ融資、同日登記した。(閉鎖②)後に京和銀行破産管財人の後藤徳太郎が当該融資を実行した駿河銀行に対して不当利得返還請求の訴訟を提起し、昭和2年2月11日東京控訴院民事第二部の判決を得ている。(S2.11.30法律)さらに京和銀行の預金債権返済のための、大正13年9月20日平田家から資産が整理委員長に私財提供されている。(閉鎖①)

こうした一連の担保提供等は京和銀行専務としての道義的責任に基づく平田の私財提供の一環と考えられ、(株)三田浜楽園の設立そのものも提供私財の整理方式として、現物出資による「土地会社を新設…預金の中より…新設会社の株式払込に振替(一株二十円全額払込)」(T13.8.2T)えられたとの仮説も成り立つのではなかろうか。三田浜楽園設立時の全額払込済み、@20円という条件は大正13年当時の土地会社新設案の内容と一致しており、三田浜楽園設立の直前たる昭和2年8月10日に三田浜塩田に設定されていた破産管財人後藤徳太郎と整理委員長の小田利三郎の所有権移転仮登記が同時に解約ないし放棄され(閉鎖①, ②)、預金債権の返済問題が決着した事実とも符合する。こうして預金返済業務の完了により5年7月30日京和銀行奈良支店が廃止され⁴⁴⁾、6年4月13日京和銀行が任意解散⁴⁵⁾することが可能となったと考えられよう。

4. 三田浜楽園の役員

まず『官報』第353号により設立時の三田浜楽園の役員を分析してみよう。三田浜楽園を京和銀行の整理の一環と考えると、設立時の筆頭取締役に紺木久兵衛という遠隔地の人物を推戴した必然性も説明できよう。紺木久兵衛(奈良市東笹鉾町13)は京和銀行頭取木林ユウの甥として明治32年8月7日奈良市川上町1に生まれ、県立郡山中学卒⁴⁶⁾、大正11年6月現在で京和銀行旧株300株主⁴⁷⁾、京和銀行の整理に関与し、大正13年12月27日木林ユウの自宅を購入(閉鎖③)、15年12月16日紺木久兵衛が購入した木林ユウ前自宅に「奈良区裁判所ノ仮処分命令ニ因リ奈良市法蓮町千百十番地木林ユウノ為メ所有権移転請求権保全ノ仮登記」(閉鎖③)、昭和4年4月奈良市議当選した。⁴⁸⁾

当初役員には平田家から取締役平田哲蔵(平田章千代の弟)、平田リン子(平田章千代の妻)の2名が加わったが、平田章千代自身の名はない。平田哲蔵(門司市大字門司1913)は明治21年生れ(衆, ヒ p31), 大正鉄工監査役(要 T1 役下, p208), 大正9年4月門司市に設立され京和銀行も50株保有した大正鉄工取締役(要 T11, 福岡, p16), 大正11年6月現在で福岡, T11/6 京和銀行旧5, 新250, 3新200株主(#45, p83), 取付時である大正11年12月6日門司市東本町にある京和銀行門司支店長(T11.12.7 読売), その後平田章千代の自宅に移転した。平田リン子(東京府豊多摩郡渋谷町大字中渋谷385, 後に船橋町に転居)は明治21年7月兵庫県平民岸川関蔵の次女に生まれた。⁴⁹⁾

次に京和銀行の関係者は監査役の田沢勇と取締役の久松英三郎の2名が判明する。まず田沢勇(茨城県東茨城郡河和田村)は京和銀行水戸支店監督(諸, T5 上 p45), 京和銀行監査役のみ(帝, T5, 職 p112), 京和銀行取締役, 京和貯蓄銀行監査役であった。(要 T11 役中 p33) 久松英三郎(東京府豊多摩郡渋谷町大字中渋谷551)は「加工海産食料品ノ販売, 海産食料品ノ委託販売」(要 S12, p31)の(株)浜藤商店(現「味の浜藤株式会社」)(京橋区明石町17)取締役(要 S12, 役下 p301)である。久松自身の京和銀行との関係は未詳だが、浜藤商店代表取締役の森口二三は大正12年ころには京和銀行支店長職にあったが、京和銀行破産で退職し、大正14年築地で浜藤商店を創業した。⁵⁰⁾

つぎに京和銀行との関係は未詳だが、取締役の太田雪松(通称憲秀, 荏原郡駒沢町深沢1262)は大正3年8月神戸地裁で破産宣告を受けた後に協賛契約を成立させ、債務を株式化した能勢電気軌道の企業再生過程に深く関与した人物とされている。⁵¹⁾ その後も八幡電気軌道など訴訟が頻発する困窮企業の役員に名を連ねるなど、企業の整理・再生に特異な能力を発揮している太田の参画は注目に値する。すなわち太田の経歴は八幡電気軌道取締役, 千代田電気代表取締役(要 T11, 役上 p155), 共同信託合資社長, 能勢電気軌道専務, 摂丹鉄道⁵²⁾ 専務, 早稲田大学評議員, 中遠電気, 山陰瓦斯, 日本家畜保険, 大正13年では早稲田製氷社長, 城北製氷専務, 阪川牛乳商店⁵³⁾ 監査役, 帝国製氷商事相談役, 12年所得税171円(紳 T14, p171), 大正14年では店舗渋谷町青山南町7-2, 荏原郡駒沢村深沢1262, 印刷会社役員, 対物信用3~5万円, 対人信用普通, 年商3~5千円, 盛衰は常態(帝信 T14, p89), 14年所得税…円, 14年1月調査で会社員, 正味身代2~3.5万円, 商内高未詳, 取引先の信用の程度は中位 Ca であった。(商工 T15, p154)

残りの取締役阿比留兼吉(麻布区森元町1-28), 監査役古久根秋三郎⁵⁴⁾, 村上鉄四郎(東京府豊多摩郡戸塚町下戸塚313,)はいずれも大正11年6月現在で京和銀行非株主であり, 就任の経緯は未詳である。請負業の古久根は京和銀行ないし三田浜楽園の工事に関係していたものであろう。

昭和7年7月29日三田浜楽園は本店を渋谷町大和田90番地(60番地は平田章千代の自宅)

から平田リン子・平田章千代の自宅（商業）である船橋町九日市 2720 番地に移転した。（商業，要 S8，p7）昭和 10 年時点の主なる業務は料理旅館，資本金 10 万円（払込済み）⁵⁵⁾，役員は社長紺木久兵衛，専務平田りん，取締役竹島福之助（船橋町），太田雪松，久松英三郎，常任監査役井上正直（麴町区元園 1），監査役平田章千代（船橋町）であった。（諸 S10，下 p37）。

5. 三田浜楽園の観光施設の概要

『京成電車沿線遊覧案内』は次のように紹介する。「ここ＜船橋＞での代表的な割烹旅館は三田浜の三田浜楽園と玉川だ…三田浜遊園地は千八百坪の海水第一プール，四万坪の海水第二プールがあり，地下一千尺から湧き出るラヂウム温泉があり，釣魚，玉突，網船，遊獵，児童園に遊戯場，ボート，野球場とすべてを完備した割烹旅館，三田浜楽園の経営にかかる大規模なもので，駅からは五分，三田浜楽園専用のバスは，いつも駅前に詰めかけてゐる（料金五銭）から，女子供を連れてゆっくり遊び廻るによい。入園料大人十銭，小供五銭（割引期間中は半額優待券を発行してゐる）」⁵⁶⁾（〈 〉内は引用者）

この海水プールは塩田のあとの低地に満潮の時に海水を引き入れたもので，地元民へのサービスで入場無料，「何分にも，塩田のあとなので，足で底をかき回すと，砂がブクブク浮き上がってくる欠点もあったが…ラセン状の滑り台，鉄棒，土俵，売店などがあつた」⁵⁷⁾という。

『船橋町誌』によれば，三田浜楽園は「総面積四万坪を有し，娯楽，釣魚，玉突，児童遊戯，野球場其の他の設備を有し，以て遊覧者を招く。殊に海水プール（千八百坪）を有するを以て夏季は地方は勿論東京人士の来遊するもの頗る多し。又場内には猿，熊，鶴其の他の動物を飼養する所あり」⁵⁸⁾とある。昭和 10 年 8 月ころ三田浜楽園に何度か滞在し小説『舞姫の暦』等を執筆した川端康成は小説『童謡』の中で，主人公・滝野が宿泊した「割烹旅館」の様子を次のように描写している。

「部屋の裏側にあたる遊園地の方からは，まだ夏の夜らしく，ラッパやハアモニカが聞えたけれども…遊郭の灯火だけは明るく見えた」⁵⁹⁾，「枕の下はほんたうに海水であつた……ところどころの水たまりは釣堀になってゐて」⁶⁰⁾，「四万坪の庭…の金網のなかで鶴などの水禽が鳴き騒いでゐる」⁶¹⁾，「庭園の大きい猿が檻を逃げて放し飼ひになつてゐる」⁶²⁾

これらの記述は三田浜楽園の特色に合致するが，特に「この夏はその池のやうな海のかげらに，舟縁の赤い，新造の屋形船が浮かんでゐた。はじめは漕ぎ廻りながら，宴を催したが，それでは電灯が取りつけにくいので，今では滝野の部屋の南窓の方につないである」⁶³⁾との記述に相応する屋形船が「船橋町三田浜楽園全景（電話一三九）（割烹旅館）」の絵葉書⁶⁴⁾に写っている。また昭和 13 年ころ三田浜遊園を上空から撮影した航空写真⁶⁵⁾にも屋形船の写真が収録されており，時期も整合する。また地元民の「日本ザルのオリが，鉄棒の右側にあり…乱暴なボスザル

がいた」⁶⁶⁾との少年期の記憶とも合致するなど、大木氏が『童謡』は“ルポルタージュ文学”（大木、p106）と指摘したように川端康成は三田浜樂園の实景をかなりリアルに記述していることが判明する。

昭和10年7月には太宰治も船橋で転地療養中であり、三田浜樂園の隣の旅館玉川の桔梗の間に長期逗留したとの大女将の証言がある。（大木、p47）太宰は『めくら草紙』の中で「私がこの土地に移り住んだのは昭和十年の七月一日である」⁶⁷⁾と書いており、昭和10年ころの当地は文豪ゆかりの観光地としても脚光を浴びた。

三田浜海水浴場で「避暑地荒しの強か者」（S9.8.13 東朝^①）を発見・追跡したプール通いの少年のお手柄や、現職の拓務大臣永田秀次郎（11年3月就任）が三田浜沖にキス釣りに出かけた帰り、海水浴で溺れた少年を救助した美談（S11.7.20 東朝^①）が大きく報じられた。この永田拓相は青嵐と号する俳人で、「人うらむ心さりけり^{ハセ}鯨日和」⁶⁸⁾の句を残したほどの三田浜のリピーターであったが、この頃には文豪や大臣もしばしば訪れ、避暑地荒しまで出没するほどの観光地に成長していた。船橋市役所は昭和12年には「三田浜樂園風景」を口絵に使用し、「船橋海岸ハ県下海水浴場トシテ帝都ニ最モ近く、『海ノ船橋』トシテ古クカラ知ラレテ居ル。船遊ビニ水泳ニ家族的清遊地トシテ屈指ノ場所デアル。中ニモ三田浜遊園地、海樂園等ハ完全ナル遊樂施設ヲ為シ、一日ノ遊覽都人土ヲ満足セシムルニ充分デアル」⁶⁹⁾と自負していた。

むすびにかえて

三田浜樂園を支えた創業資金の金主として小樽の板谷家の存在を省略することは出来ない。板谷宮吉（第二代）は板谷商船社長、十合呉服店会長などを兼ねるいわゆる「板谷財閥」の当主で、海運業で蓄積した豊富な資金で地元北海道の農地、山林、鉱山等に投資、東京・大阪等でも積極的に不動産投資を行った。昭和10年12月には京成電気軌道取締役就任、1万株、第8位の大株主となっている。⁷⁰⁾ 彼が京成沿線・船橋の三田浜樂園に養子の板谷順助（小樽市富岡町）の名義で大口融資を敢行したのもこうした大胆な大都市近郊への不動産投資の前段階と捉えることができよう。すなわち昭和4年2月14日16万円を「申請人（平田章千代）カ被申請人（板谷順助）ヨリ申請人ノ不動産ヲ売渡担保トシテ借受ケタ」（2720番7閉鎖登記簿）のであった。この時期は2年12月1日設立された三田浜樂園が塩田跡に料理旅館・遊園などの観光施設を本格的に稼働させた時期に相当し、板谷家からの16万円などが主要な創業資金源であったと考えられる。9年後の13年8月1日（株）三田浜樂園は観光施設から生み出される純収益でもって「売渡担保」となっていた土地の相当部分を板谷から買戻し（2720番7閉鎖登記簿）、残りは買戻特約が放棄され板谷側の所有が確定した。（2720番1閉鎖登記簿）

もとより直接の因果関係はないのであろうが、板谷家と姻戚関係ある水島廣雄そごう社長が

昭和40年代以降に千葉・柏・船橋・木更津等、京成沿線・千葉県下に大量出店し、当該地域で圧倒的な存在感を示した事実も何か板谷と京成沿線との浅からぬ因縁を感じさせる。

注

- 1) 2) 京成電鉄旅客課編『京成の四季』千葉観光経済新聞社，昭和33年，p115，109
- 3) 『官報』第199号付録，大正2年4月1日，p1
- 4) 5) 6) 遠藤寛夫『先駆者の旗－丹沢善利伝－』昭和45年，p249，392，410
- 7) 8) 林政春『房総財界太平記』多田屋，昭和51年，p268所収，p265所収
- 9) 小川国彦氏は著書『利権の海 東京湾埋め立ての虚構』（昭和45年，社会新報）で丹沢善利を「怪物」（p192）と評している。「虚業家」は拙稿「企業家と虚業家」『企業家研究』第2号，企業家研究フォーラム，平成17年6月参照
- 10) 大阪湾の臨海型テーマパークたる香榎園に関しては拙稿「阪神電気鉄道－阪神間の遊園地・都市開発に果たした役割－」宇田正，浅香勝輔，武知京三編『民鉄経営の歴史と文化 西日本編』古今書院，平成7年9月，筆者が執筆した『阪神電気鉄道百年史 第2章』平成17年，p94以下参照
- 11) 大木勲『船橋で結ばれた奇縁の二大作家 川端康成・太宰治』京葉新報社，平成15年。本稿も文豪との関係部分の多くを同氏の研究に負っている。
- 12) 『京成電鉄85年の歩み』京成電鉄，平成8年，p168～177
- 13) 仁礼景範（東京市芝区三田綱町10）は鹿児島出身の海軍軍人，海軍少将，明治13年船橋町九日市浜田で26町7反7畝の塩田を開設，25～6年海軍大臣，31年では子爵，後備海軍中將，枢密顧問官（紳M32，p75），33年3月払下を受け新開地の所有権保存（閉鎖①），三田浜の名前は仁礼邸の地名に由来する。
小川紋蔵は仁礼家の旧小作人から頭角を現し，明治38年塩田を継承。三田浜楽園に隣接する割烹旅館・玉川の名は経営者小川家の初代の素人相撲の四股名に由来（大木，p27）
- 14) 同種の土地会社として拙稿「近江商人系資本家と不動産・観光開発－御影土地を中心として－」『彦根論叢』第375号，平成20年11月参照。土地会社形態は拙稿「金融恐慌と証券化処理－我国における土地会社方式を中心に－」『証券経済学会年報』第32号，平成9年5月，証券経済学会参照。
- 15) 同様の視点からの両宮敬次郎の二面性とノブ夫人の存在については別稿「両宮敬次郎－熱海への観光鉄道を開いた相場師－（仮題）」を予定している。
- 16) 「多店舗展開型銀行のリスク管理－大正期の京和銀行を中心に－」『彦根論叢』第374号，平成20年7月。前稿と同様に三田浜楽園創立時の筆頭取締役・紺木久兵衛（昭和32年死亡）の長男に当たる紺木久彌氏（京和銀行頭取木林ユウが大伯母に当る）に種々ご教示賜った点に深謝したい。
- 17) 岡田耕平（東葛飾郡中山村鬼越）は酒類醸造（『帝国実業名宝 酒類生酢醬油味噌之部』商進社，大正8年，p97），大正5年時点で船橋商業銀行頭取，船橋鉄道社長①2,170株（帝T5，p7），東葛人車鉄道50株（T1/12 #4営）監査役（帝T5，p10）であった。
- 18) 19) 『日本鉄道請負業史 明治篇』鉄道建設業協会，昭和42年，p232，130，328
- 20) 『帝国鉄道要鑑 第三版』鉄道時報局，明治39年，蒸p289
- 21) 22) 『写真でみる船橋2 九日市』船橋市郷土資料館，平成4年，p104
- 23) 28) 製塩業に従事した船橋市こびら屋旅館主人・大数加光治氏談話（市史，p393～4）
- 24) 『人事興信録』五版，人事興信所，大正7年，しp14
- 25) 杉山弥太郎（千葉町本町）は明治24年開業の弁護士（辞書，p583），福沢桃介が社長の合同瓦斯取締役（帝T5職p295）

海浜リゾートの創設と観光資本家

- 26) 船橋鉄道は大正3年8月資本金40万円で設立され(諸 T5, 下 p77), 「地方一流の資産家」(辞書, p147)である「岡田耕平氏社長の下に…事業の経営に当らんとした」(T8.3.13 内報①)が, 「レールと車両は, 現地に到着することなく, 抵当に取られ, 転売され」(佐藤信之『房総の乗合自動車』崙書房, 昭和63年, p39), 「工事中途にして解散の余儀なきに至りたる結果, 基礎工事を請負ひ居たる尾高<万次郎>氏の迷惑も尠なからざりし」(T8.3.13 内報①)事情から, 大正8年3月ころ尾高を中心に「此俣に朽ち果つるを遺憾なりとし, 茲に再興計画を見るに至りたる」(T8.3.13 内報①)計画が同名の船橋鉄道(第二次)であった. しかし同社もまた疑獄事件で中断を余儀なくされた.
- 27) 45) 『本邦銀行変遷史』銀行図書館, 平成10年, p715, 213
- 29) 農商務省工務局工務課『工場通覧』大正10年, p1113
- 30) 高木次郎経営の日華土地塩業は大正9年「支那膠州湾に製塩事業を経営すべく二百町歩の塩田許可を獲得し, 内約五十町歩は既に工事完成し目下着々残工事進捗中」(『増田 BB 銀行旬報』5巻4号)と報じられた. また津下精一も山東製塩会社に4万円出資した.
- 31) 『昭和産業史 第一巻』東洋経済新報社, 昭和25年, p651
- 32) 33) 『財界二十五年史』帝国興信所, 大正15年, p393
- 34) 類似の石井亮三は「行徳町俣の人, 製塩を業とす」(辞書, p613)
- 35) 熊取谷七松は明治13年1月17日熊取谷利平の長男に生れ, 砂糖貿易商に従事(『大衆人事録』昭和2年, 帝国人事通信社, ヒ p16), 東京市日本橋区箱崎町1-1, 砂糖商, 開業…正味身代未詳, 収入 未詳, 取引先の信用の程度 Da(5段階中の下から2位), 5年度所得税…円, (7年3月取調)(商, T7, p606), 国際活映(増田信一の関係会社)取締役, 東京興業信託, 東神土地建物, 東神海運各取締役, 秋田木材工業監査役(要録, T9, 役下 p171), 大北炭硯发起人, 熊取谷七松商店は大正9年ころ破綻整理(T10.2.2 内報③), 大正10年ころ(株)熊取谷商店社長, 郡山紡績監査役就任(要録, T10, 役下 p254), 大正11年では砂糖貿易販売の(株)熊取谷商店, スマトラ農林各社長, 尾道軽便鉄道, 硫黄島拓殖製糖, 尾道船渠造船所, 東京砂糖貿易各取締役, 秋田木材工業監査役(要 T11, 役下 p171), 京・岡崎1-1, 株式組織の砂糖商, 開業…、対物信用は負債, 対人信用は薄, 年商未詳, 盛衰は衰(帝信 T14, p365), 朝鮮京南鉄道取締役(『銀行会社年鑑』ダイヤモンド, 昭和4年, p489), 東京市日本橋区北新堀町(大北炭硯の創立時). なお船橋の五日市塩田を石井亮蔵から買取した「東京市日本橋北島町の砂糖問屋熊取谷某」(皆川貞太郎談話『船橋市史前編』, p393)は熊取谷七松と思われ, 熊取谷七松の五日市塩田が朝日土地興業の設立に繋るのであろう.
- 36) 「三田浜塩田発祥の地」碑文
- 37) 千野原靖方『行徳塩浜の変遷』崙書房, 昭和53年, p129
- 38) 農商務省工務局工務課『工場通覧』大正10年, p1113, 商工 T3, p4, 13
- 39) 前掲拙稿「多店舗展開型銀行のリスク管理」, p50 以下参照
- 40) 『官報』第353号, 昭和3年3月5日, p133
- 41) 57) 66) 塚田龍『ぶらり船橋そのむかし』平成元年, p107
- 42) 56) 『京成電車沿線遊覧案内』昭和10年, p129 ~ 130
- 43) 大正12年1月『大阪銀行通信録』
- 44) 『南都銀行五十年史』南都銀行, 昭和60年, p80
- 46) 48) 奥田信義編『現代人物誌 第十七編』昭和28年, p610
- 47) 京和銀行『第四十五期営業報告書』大正11年6月, p62
- 49) 『人事興信録』五版, 大正7年, ひ p36
- 50) 「味の浜藤株式会社」の電子情報による.
- 51) 能勢電気軌道『風雪六十年』昭和45年, p42. 三田浜楽園の「楽園」の名称にも京和銀行の苦境を脱却し,

明るい未来への関係者の熱い期待感が込められていたように感じられる。

- 52) 摂丹鉄道は西藤二郎「摂丹鉄道の計画と挫折」『京都学園大学論集』14巻3号, 昭和60年3月参照
- 53) 破綻した大野銀行が経営にも大きく関わっていた「立派な獣医を雇って大々的に経営してゐる」(S2.7.20 法律) 東京市内の「牛乳牛乳業者の老舗」(T6.10.11 内報)
- 54) 古久根秋三郎(京橋区新栄町2-5)は合資会社形態の土木建築請負, 開業…(帝信 T14, p282), 13年所得税36, 14年6月調査で土木建築, 正味身代未詳, 商内高未詳, 取引先の信用の程度5段階の下から2位 Da(商工 T15, p387), 上州電気鉄道監査役(要 S8 役下, p82), 大正11年6月現在で京和銀行非株主
- 55) 58) 『船橋町誌』昭和12年, p163, 294
- 59) 川端康成「童謡」『川端康成全集 第五巻』昭和55年, 新潮社, p40960) 63) 前掲, p417
- 61) 62) 前掲, p426, 422
- 64) 『絵はがき-写真に残された明治~大正~昭和-』(平成17年, 船橋市郷土資料館発行, 地域研究資料4, p12 収録)
- 65) 68) 69) 『船橋市々勢要覧 昭和十三年版』, 船橋市役所発行
- 67) 太宰治「めくら草紙」『太宰治全集 第2巻』筑摩書房, 平成10年, p303
- 70) 『京成電鉄五十五年史』京成電鉄, 昭和42年, p500, 『株式会社債年鑑昭和十四年版』山一証券, 昭和14年, p34

[参考資料] 大正5年時点の船橋商業銀行役員一覧

頭取岡田耕平, 取締役金子太郎吉[船橋町五日市1026, 乾物商兼肥料商・カネ太(商, る p12), 米穀肥料問屋(日韓, p19), 千葉日星肥料合資代表社員(諸 M39, 下 p64), 船橋商業銀行取締役のみ(帝 T5 職 p93)], 宇賀山金次郎[船橋町九日市1256, 医者, 納税額23円(『房総紳士録』多田書店, 大正11年, p6), 船橋鉄道取締役②500株(帝 T5, p7)], 堀井豊吉[船橋町九日市, 古着商・吉野屋(商, る p11), 古着商(日韓, p19)], 永岡佐五兵衛[船橋町, 質屋業(日韓, p19) / 永岡佐五八は船橋町の和洋酒類商(前掲『帝国実業名宝』, p97)], 監査役石井潔[船橋町九日市815, 石油陶器商(日韓, p21), 船橋商業銀行監査役のみ(帝 T5 職 p19)], 泉対峰次郎(船橋町), 川口喜代松[船橋町, 材木商(日韓, p19), 豊富村], 顧問山田惣次郎(船橋商業銀行元取締役), 金子平五郎(船橋商業銀行元取締役)(帝 T5, p6)

◎ 引用文献略号一覧(発行順)

[千葉県内文献] 辞書…『房総人名辞書』千葉毎日新聞社, 明治42年, 町村…『房総町村と人物』大正7年, 市史…『船橋市史 前編』昭和34年, / [新聞・雑誌] T…『東洋経済新報』, 東朝…『東京朝日新聞』, 読売…『読売新聞』, 時事…『時事新報』, 法律…『法律新聞』/[会社録] 京浜…『京浜実業家名鑑』明治40年, 諸…『牧野元良編『日本全国諸会社役員録』商業興信所, 商…『日本全国商工人名録』, 明治31年, 日韓…『鈴木庸之助編『日韓商工人名録』明治41年, 実業興信所, 要…『銀行会社要録』, 商工…『商工信用録』東京興信所, 帝…『帝国銀行会社要録』帝国興信所, 帝信…『帝国信用録』帝国興信所, 内報…『帝国興信所内報』, 紳…『交詢社『日本紳士録』交詢社, 衆…『大衆人事録』昭和5年, 帝国人事通信社 / [類出資料] 大木…『大木勲『船橋で結ばれた奇縁の二大作家 川端康成・太宰治』京葉新報社, 平成15年, 閉鎖①…『閉鎖登記簿(船橋町九日市字浜田2720番1), 閉鎖②…『閉鎖登記簿(同上2720番7), 閉鎖③…『閉鎖登記簿(奈良市東笹鉾町13), 商業…『商業登記簿(三田浜楽園)』

